

対話でつなぐ連続座論：都市空間のレシピ

4 奈良町：まちへの想いと活かし方—多様なリノベーションとマネジメント—

ゲスト：南 哲朗（奈良町資料館 館長）
藤岡 俊平（奈良町宿 紀寺の家 代表）
中川 直子（ならどっと FM 取締役局長）
レポート：中村 茜（関西大学）



レシピ # 4 は奈良の旧市街地（奈良県奈良市の中心市街地南部）である「奈良町」です。710年に平城京へ遷都されたとき、飛鳥寺が元興寺として平城京に移されました。この元興寺の旧境内を中心とした地域を「奈良町」と呼んでいます。平城京の「外京」にあたり、当時の道筋をもとに発展した1300年もの長い歴史をもつ町です。

なお、奈良町チームでは、「奈良町」をきたまちも含めた、**広義**の奈良町として定義しています。



今回の公開研究会では、答えを出すことを目的としていません。したがって、私が登壇者の方々の話から受けた、主観的な印象や感想について報告します。

□ 肌で感じた「奈良町」



公開研究会に入る前に、実際に奈良町（ここでは狭義の奈良町で、きたまちは含みません）を散策しました。バスで紀寺町へ向かい、紀寺の家や奈良町資料館を訪れました。日曜日だったため、観光客も多くいました。歴史的な、生活感溢れる街並みが印象的でした。「（観光用に古いものを新しくするのではなく）**古いものを古いまま見せている**」「**生活をそのまま見せている**」ところが奈良町の魅力であると思いました。（余談ですが、ここが京都との決定的な違いであると思います。）

しかし、良い面だけではなく、問題点も目立ちました。まず、道路がとても狭く、車1台通るのにもやっとでした。また、奈良町都市景観形成地区に指定されているとはいえ、景観にそぐわないような建物も見受けられました。

□ 「規制」をかけるべきか



奈良町では道が狭く、家の玄関の戸がすぐ道に面しています。さらに、その細い道には車も入ってきます。ゆえに、交通整理が問題となっています。そこで、交通規制をかけるべきか、という議題があがりました。「規制はかけるべきではない」という意見ばかりでした。奈良町は生活感があるところが魅力。そこで交通規制をかけてしまうと、生活を阻害してしまいます。また、この狭い道だからこそ「愛着を繋いでいっている実感」がわかります。古いところを残し、住民が不便さを楽しむ必要があります。規制をかけずに町をつくっていくことが大切なのではないのでしょうか。

また、奈良町都市景観形成地区の景観形成基準・修景基準・修理基準においては、多くの人にメリットを感じてもらうためにも「規制を緩和すべきだ」という意見があがりました。その時代の暮らしに合わせた改修を認めることにより、より暮らしやすくなると思いました。一方で、防火壁など、守るべきものとしての規制の強化も必要かもしれません。

□ 次世代への継承



近鉄奈良の駅前には景観を潰すような大きなマンションが、宿泊施設が少ないといわれている奈良では、マンションだけでなく駅前にホテルも建設されつつあります。奈良町の古民家や町家もどんどん潰れています。このままでは奈良町らしさがなくなってしまうかもしれません。しかし、お話によると、住民自身があまり奈良町に対して愛着はないようです。

そのような中でも、「奈良町が大好き」だという思いから、次世代へ積極的に継承しようとしている方々もいます。以下では、ゲストの方々のお話を簡潔にまとめています。

(1) 南哲朗氏の取り組み

奈良町資料館では、**①奈良の魅力を発信する仕組みづくり** **②奈良の新しい観光資源の開発** **③観光活性化の連携体制づくり** という取り組みを行っており、そちらでは、**①誇りを持つ** **②尊敬する** **③課題発見** の3つを目標としています。南氏の『もう1回来たい』と言ってもらうのがおもてなしの心だ」という言葉がとても印象的でした。また、大人たちだけでなく、子どもたちに奈良町の良さを知ってもらうことをとても大切にされていました。子どもたちが奈良町に来ることによって、将来への繋がりが期待されそうです。

(2) 中川直子氏の取り組み

中川氏は「奈良を知るために奈良の放送局に入った」とおっしゃっていました。彼女の放送局である、ならどっとFMは奈良町、つまり町家の中にある珍しい放送局です。町並みを保存するために、放送局には格子が入っています。改装はほとんどしていません。この放送局では喫茶やバーも営業しており、日本人にとって懐かしい床の間や畳、中庭をそのまま残しています。もちろん、クーラーもありません。「そのまま残す」ことは次世代への継承といえそうですが、一方で安全・安心面といった問題点もあるのが現状のようです。

(3) 藤岡俊平氏の取り組み

藤岡氏は築100年の町家を今の暮らしに合わせて改修を行い、町家1軒—紀寺の家—をまるまる1組のお客様に使ってもらうという取り組みを行っています。材料をまるごと変えてしまうのではなく、古材を使い、さらに修復した痕跡をあえて残しています。紀寺の家は、宿というよりはモデルハウスのようなもので、町家暮らしを実際にお客様に体験してもらうためのものです。実際に、ここに泊まった人が奈良町に住むというケースもあります。町家を守るためには、そのときに合わせた改修を加え、今の技術・工夫で暮らせるということを知ってもらう必要があります。

□ 結び

奈良町の住民は、静かに暮らしている人が大半であり、「あまり多くの人に来てほしくない」というのが本音だそうです。さらに、住民の中で、奈良町が好きだという人も少数なのが現状です。このままでは、奈良町は消えてしまいます。今回のクロストークで得たヒントをもとに、今後の奈良町及び住民の在り方についてまとめさせていただきます。

- **住民がもっと奈良町を好きになり、協同で創造していく**
- **組織的なつながりの強化を**：人々の活動など、ソフト面の波及効果の重要性
- **持続可能な町家のモデルの構築**

クロストークの様子



レシピ#4では、「継承」についてもっとも考えさせられました。ただそのまま残すということだけが継承ではなく、時代に合わせた改修やリノベーションを行い繋いでいくことも1つの継承です。たとえば、町歩きの道中で見かけた、夢キューブ（商業利用）は、町

家でありながらも現代らしさがあり、好例だと思いました。住居利用としては、紀寺の家のような、現代風の町家はとても住みやすそうでした。「今の町家での暮らしはこんなかんじです」、といったように発信していけば「奈良町の町家に住みたい」という人も期待できるのではないのでしょうか。奈良町の町家は減りつつあり、なくなってしまうかもしれませんが、次世代への継承を積極的に行うことによって、残すべきであると思います。

最後に、途中でこの奈良町チームに参加したにもかかわらず、レポートを任せていただいたことにたいへん嬉しく思います。拙い文章ではありますが、最後までお読みいただき、ありがとうございました。